二〇二四年度 群馬県立女子大学文学部国文学科 一般選抜前期日程試験問題

国語

（一〇〇分）

（注意事項）

1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。

2 問題冊子は一冊（1頁から17頁）、解答用紙は二枚（問題一用紙と問題二用紙）あるので注意すること。

3 用紙の脱落や汚れに気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせること。

4 試験開始直後に、各解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入すること。

5 解答は、すべて解答用紙の解答欄内に記入すること。

問題一

（一〇〇点）

（一）次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

考えごとをしていると、いろいろな音が聞こえてくる。パキパキパキパキという、考えが組み上がる音。おわああああああんという、果てしない問いを前にして深淵（しんえん）が鳴く音。ばちばちばちという、頭の中で火花が散るように思考が加速する音。

誰かと一緒に考えているときは、もっといろんな音がする。ゴポゴポゴポゴポと、共に深い思考の海に潜っている音。ヒュッと、誰かの鋭い意見が矢となって風を切る音。とりわけ、がっしゃん、と何かが壊れるような音はよく聞こえてくる。繊細なガラスが割れる音というよりは、重い陶器が砕けるような音だ。

誰かが自分の考えを話している。がっしゃん、と音がする。何の音だろう、とわたしは不思議に思う。別の誰かが考えを話し始める。またがっしゃん、と音がする。後ろを振り返るが、特に何かが落ちているわけではない。わたしの頭の中だけで鳴っている音なのだ。目の前のひとが「永井さんは、さっきなんでああ言ったんですか」と不意に問いを投げかけてくる。どきどきしながら、何とか先ほど自分が言った考えについて説明する。目の前のひとは、うなずいてみせたあと「さらに質問したいんですけど」とわたしに言う。がっしゃん、と音がする。

ひとびとと集まって哲学の時間を持つとき、①事前に話すためのルールを設定することが多い。いきなりテーマについて対話を始めてもいいのだが、わたしたちはひとと集まって話すことが苦手である。うまく考えられたとしても、それを適切にひとに伝えたり、話を聞いたりすることが本当に下手だ。考えを闘わせて、誰が一番強いのかを決めることが好きで、ひとと協力して意見を練り上げていくことがとても苦手だ。だからルールを紹介して、会を始めることになる。だが、これは方向付けや制約というよりも、わたしたちが普段いかにうまくコミュニケーションできてい

ないかを思い出すセルフケアの促しでもある。

わたしがよく用いるルールは「よくきく」「自分の言葉で話す」「〈結局ひとそれぞれ〉にしない」である。状況や場合によって「理由を挙げて話す」「変わることをおそれない」「ゆっくり考える」などが付け加わることもある。

ある小学校で「死んだらどうなる」というテーマで哲学対話をする。彼らは生まれ変わりについて議論を始め、生まれ変わったと言えるためには、どんな条件が揃っていなければならないか、あーだこーだと言いあっている。②「きく」というのは便利な言葉だ。相手が何を言いたいのかじっと「耳を澄ませる」という意味もあるし、何を言おうとしているのか「尋ねる」という意味も、そして、相手が誰であっても「耳を傾ける」という意味もある。こうして、「話す」ことよりも「きく」ことに集中してみると、ひとの言葉がずるりと直にわたしの中に入ってくるようになる。わたしの奥底に一瞬で入り込んで、わたしの実存をスリリングに脅かす。

小学生たちは、生きるとは何か、どのように生きるべきかについても言及し始めた。生きて、死んで、そして生まれ変わって、また生きる。そうするには、どのような状況や条件が考えられるのか。議論がゆらゆらと揺れている中、ずっと眉間に皺をよせて考えていたある女の子が、はいと手を挙げた。

「みんなは、生きるということがメインで、そのために死んだり生まれ変わったりするって言っているような気がするんだけど、そもそも、生まれ変わるということ自体が目的で、そのために死んだり生きてるだけだったらどうする？」

それはまったく新しい視点で、そしてわたしも含めて、輪の中の誰も考えたことのない論点だった。彼女の提案は、

一見「来世」や「輪廻」のことを言っているようだが、生でも死でもなくその転換自体が目的であるというものだ。ものすごく気持ちがいい、なんて理由だったら面白いなと想像する。魂だけとなった存在が、風呂上がりのビールを飲み干すひとのように、「この一回のために生きてる！」と快感に身を震わせる情景が目に浮かぶ。

「枠組みを変えてみるんだよ」と女の子はつづけて言った。

③またどこかでがっしゃんと、壊れるような音がした。

わたしたちはわけのわからない世界に、意味づけをしたりレッテルを貼ったり、ヴェールで覆ったりして、何とか生き延びている。何年もかけて信念を構築し、それを前提にした上で世界を解釈したり、何かを創造したりする。にもかかわらず、哲学はあっという間に「前提を問い直す」などといって、積み上げたレンガを粉々にしてしまうし、他者はわたしの大切な意味づけを、デリカシーの欠片もなく剝がしてしまう。そう考えると、哲学対話とはわたしたちを自由にするどころか、立っている場所を脅かす兵器でもある。だからこそ、哲学や他者によって問い直しを迫られたとき、わたしたちは自分自身が壊れるような感覚を抱く。

街場で行った哲学対話で、持論を展開させている中年の男性がいた。満足そうに話し終えた男性に対して、中学生だと言っていた女の子が、不思議そうに手を挙げる。彼女は「なんでそう思うんですか」と言った。哲学対話の時間では、なんてことのない質問だ。だが、男性は「なんで……」と呟いたまま、黙り込んでしまった。彼は、機能不全をおこしたロボットのように目を見開いて、呆然と宙を見つめていた。

しかも、哲学はわたしたちの目を見えるようにするどころか、より見えなくする。近眼のひとが眼鏡を外して見るように、ぐねぐねと境界が混ざり合い、わけのわからない世界が露わになる。こんなところで自分は生きていたのかとびっくりする。

だがたまに、ぐにゃりとした秩序のない世界を、平気な顔をして歩き回っているひとがいる。彼らにはレッテルや意味づけ、もっと言えば世界に対する偏見がなく、ただただ自然に、穏やかな表情で仕事をしたり、コーヒーを飲んだり、眠ったりして、生活を営んでいる。

ある夜、知人4人で食事をしていたとき、その中に福岡出身のひとがいた。彼にあれこれと質問をし、あそこはいいところだよね、あそこは何がおいしいの、などと九州の話で盛り上がる。すると、ずっとにこにこと黙って話を聞いていた1人が、このあとの予定を尋ねるような気軽さで自然に問いかけた。

「九州って四国？」

思わず絶句してしまう。「違う」と言うので精一杯だ。このひとはそれを知らずにどうやって生きてきたんだろう。焦るわたしたちと対照的に、彼はふむふむ、と興味深そうに話を聞いている。違う。もっと深刻に受け止めて欲しい。福岡出身の知人は、とうとう「古事記をもとに考えれば、『四国』と表現することも可能かもしれない」など、なんとか合理化を試み始めた。無理がある。

だが、九州や四国、東北などの区分は、わたしたち人間があとから勝手に決めたものだ。そしてそれを「知っていなければならない」と勝手に思い込んでいるものだ。わたしは、自分の前提に気づかされるとともに、彼の無垢（むく）な世界とのかかわり方に憧れた。「福岡って四国？」ではなく「九州って」という問い方もいい。彼は普段から、ジンジャーエールを自分で買ってきて、飲んだあと驚いた顔で「ジンジャーエールの味がする」と言うひとなのだ。

世間ではそういったひとたちのことを④「天然」などと名付けて、何とか型に当てはめようとする。しかし彼らは

その言葉からもするりと抜け出して、楽しそうに走り回っている。わたしがぐにょぐにょした世界で身動きを取れずにおろおろしている間に、気にせず前にずんずん進んで、こちらにおーいと手を振っている。凝り固まったわたしを粉々に打ち砕いておいて、けらけらと笑っている。

そしてそれがわたしには、なぜだかとてもうれしいのだ。

⑤哲学対話をしているときも、同じような喜びがある。わたしの硬直してしまった信念を誰かがあっけなく壊してしまう。ごわくて、危なくて、うれしくて、気持ちがいい。どきどきしながらも、素肌に風が当たるかのような感触がある。わたしは世界に身ひとつで佇(たたず)まざるを得ない。だが、そんなわたしが、わたしであることを確認することができるのもまた、他者の言葉によってなのである。他者の考えや言葉がざわざわとわたしの素肌をなでるとき、わたしはじめて自分がどこにいるのかがわかる。真っ暗闇の中、誰かに腕をつかんでもらえたときのように。

そうしてまたわたしたちは、新しくまた何かをつくりはじめる。

⑥ガシャンという音は、わたしが壊れる音である。だが実はそれだけじゃなくて、わたしができあがっていく音でもあるかもしれない。崩れてしまったわたしの部分に、他者の考えや言葉が、パーツとなって飛んできて、わたしの身体にフィットする姿を想像する。ガシャンと音がする。気持ちがいい。そうか、これは、生まれ変わりの音だ。

ああ。この1回のために生きてる。

（永井玲衣「ガシャン」による）

問1　傍線部①「事前に話すためのルールを設定することが多い」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問2　傍線部②「「きく」というのは便利な言葉だ」とあるが、なぜ便利なのか。説明しなさい。

問3　傍線部③「またどこかでがっしゃんと、壊れるような音がした」とあるが、「がっしゃん」とはどのような音か。説明しなさい。

問4　傍線部④「「天然」などと名付けて、何とか型に当てはめようとする」とあるが、「型に当てはめ」るとはどういうことか。説明しなさい。

問5　傍線部⑤「哲学対話をしているときも、同じような喜びがある」とあるが、「哲学対話」をする「喜び」とはどのようなものか。説明しなさい。

問6　傍線部⑥「ガシャンという音は、わたしが壊れる音である」とあるが、「ガシャン」とはどのような音か。説明しなさい。

（二）次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近代医学の成立は、一般に、①身体への回帰という観点から説明されてきた。つまり、病める身体に対して直接注がれる視線、古くから医学の本質的道具であった臨床医学的視線が、その効力を再び取り戻したことによって、病の真理を知覚以前の空間に探し求めていた分類学的医学から、客観的な観察を拠り所とする実証的医学への移行が可能になったのだ、と。

これに対し、フーコー[注1]は、近代的な臨床医学がそのようにして登場したことを認めながらも、そのすぐ後に現れる病理解剖学こそが、医学の歴史に決定的な転機をもたらしたのだと主張する。すなわち、ただ単に病者に対する直接的視線が価値づけ直されるだけでなく、身体内部の探索が医学にとって本質的かつ必要な任務となったときに初めて、我々が現在知るような医学が成立したのだ、と。

それでは、そうした新たな任務はいったいどのようにして生じたのか。この問いに対してフーコーは、病の定義および死の概念をめぐる変化をその重要な契機として描き出しながら答えようとする。

『臨床医学の誕生』[注2]によれば、当時の臨床医学にとって、病とは症状の集合にすぎなかった。すなわち、身体の表面において観察される症状の展開それ自体が、病そのものとみなされていたということだ。したがって、医学の任務とは、目に見える表層において生起する現象を観察し、それをそのまま記述することであった。そしてその限りにおいて、②死体を開いてその内部に視線を注ぐという解剖学的作業は、臨床医学にとって必要とされてはいなかった。もっぱら生ける身体において時間的に展開される現象に注がれていた臨床医学的視線は、非時間的な死体空間の調査とは無縁のものだったのである。

そして死の概念について言えば、死は当時、生と病に絶対的な終わりをもたらすと同時に、病的現象と同じやり方で身体を破壊するものとみなされていたという。そのため、死後の身体に残された痕跡について、それが病によるものなのか死によるものなのかを判別することはもはや不可能であるとされていた。つまり、③死体は、いわば死と病とを混ぜ合わせることによって、臨床医の視線を欺くものと考えられていたということだ。

したがって、死体解剖が医学にとっての本質的な任務となるためには、病および死に関する以上のような考え方の根本的な刷新が必要であった。フーコーは、病理解剖学の登場が、実際に以下のような二重の変化によって可能になったことを示そうとする。

一方では、症状の時間的継起が、身体内部に標定[注3]されうる「病変」によって引き起こされた二次的な効果とみなされるようになる。すなわち、身体の表面に観察されるのは、もはや病そのものではなく、身体の深みにおいて起こった出来事に起因する現象にすぎないとされるということだ。以後、死体において空間的に特定されうるものこそが、症状が生じる出発点としての「原初的病巣」とされるようになるのである。

他方では、生そのものにおける死の不断の進行が、病的プロセスとは区別されるものとして発見される。死が、唯一の絶対的瞬間であることをやめて、時間のなかに分散されるということ。死は、もはや生を外から不意に襲うものではなく、生のなかに配分されているもの、生とのあいだに内的関係を持つものとしてとらえられるようになるということだ。そしてここから、そもそも生の根底には死があるという考え、生とは死への抵抗の総体であるという考えが生まれるとともに、死は、生の真理を語るための視点として役立つものとなる。死体を手がかりに病をポジティヴなやり方で解読しようという試みに対し、もう一つの正当化が与えられることになるのである。

病と死に関する考え方がこのように根本的に変化することによって、医学に対し、新たな任務が与えられることになる。病変こそが症状を説明するという考え、そして④死によって生が支えられるという考えとともに、死体を開い

て病の座を標定しようとするものとしての病理解剖学が医学にとって本質的な任務となるのであり、こうして医学は、ついに、実証的な探究としての地位を獲得するのである。

（慎改康之（しんかいやすゆき）『ミシェル・フーコー』による）

注1　フーコー　…　フランスの哲学者（一九二六～一九八四）。

注2　『臨床医学の誕生』　…　フーコーの著作。一九六三年刊。

注3　標定　…　めじるしを定めること。

問1　傍線部①「身体への回帰」とあるが、どういうことか。説明しなさい。

問2　傍線部②「死体を開いてその内部に視線を注ぐという解剖学的作業は、臨床医学にとって必要とされてはいなかった」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問3　傍線部③「死体は、いわば死と病とを混ぜ合わせることによって、臨床医の視線を欺くものと考えられていた」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問4　傍線部④「死によって生が支えられるという考え」とあるが、どのようなものか。説明しなさい。

問題二

（一〇〇点）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大夫の判官光範が津[注1]の国のかためありける時、左馬頭正儀にたびたびはかられけるをくちをしく思ひこめて過ぐしはべりけるに、去ぬる住吉の戦ひに討たれて失せし宇野の六郎といひしが子に熊王といひけるが、まだ幼き時光範に言ひけるは、「正儀は我がためにも親の敵にて候へばいかにもして討ちはべらん。河内[注2]へうち越えて正儀に仕へはべらんに、幼くて候へば、などか心を許し申さんことのなかるべき。たとへ心を許すことのはべらずとも、七年八年ほども仕へ候はば、そのうちには（ア）討ちぬべきたよりのいかでなからん。御いとまをこそたまはらめ」と涙を流せば、光範もいとあはれと思ひながら、幼ければ敵の国へやらんも心もとなし。または命にかはりて討たれし者の子なれば、形見とも思ふべけれと強ひて止め候ひけれども、「（イ）少しおとなしくなりなば、よも近づけたまはじ。幼くありなん時参りてこそ」としきりに望みければ、力及びたまはで、常に身を放ちたまはざりし刀をたまひて、「これにて本意遂げよ」とて、阿倍野[注3]まで人あまた添へてやらせけるに、それよりは我に等しき童一人を具して赤坂の城に行きて、そのほとりにたたずみてありけるを、兵庫助忠元が見つけて、「（ウ）いかなる人にやおはすらん」とたづねられて、「我は大夫尉光範の侍に宇野の六郎といひける者の子に熊王といへる者にて候へ。父にて侍る六郎はいにしへ住吉の戦ひに討たれて候ふを、一門にて侍る備後守が我を追ひ討ちて領地を奪ひ候へども、光範と心を合はせ候へば、（エ）せんかたなくて、いかなる寺へも入りはべりて、僧法師にもなり、父のあとをとぶらひ候はんがためにさそらへはべる[注4]」と言ひけるを、あはれと聞きて、まづ我が方に伴ひてさまざまいたはりて後に、正儀にありつることを語りて、「幼くは候へど心のさかさかしくて」など申すに、あはれがりたまひて召し寄せたまへり。もとより情ありける人なりければ、熊王も思ひつきて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり。十五、六ほどになりければ、「河内国にて少しき所を（オ）しらさん」と言ひけれども、恥[注5]ある一矢をも射候ひてこそとて辞しにけり。

明くる年の春、父が七めぐり[注6]に当たりけるに思ひつけて、今宵は正義を討ちて父の手向けにもし、光範の心をも休めたてまつらんと思ひ立ちてありけるに、その日正義の言ひしは、「今日こそ吉日にてあるなれば元服せよかし」とて、和田和泉守[注7]に髻取り上げさせて、和田小次郎正寛と名乗らせ、吉野殿[注8]よりたまはせける鎧をたまひければ、熊王涙を袖にかけて喜ぶ。夜に入るまで正義の前にありけるが、またふと思ひ出でて、討ちたてまつらんなれば今宵こそと思ひて、膝を直して正義に目をかくれば、年ごろの情深かりしこと、今日の元服のことなど思ひ続けて、いかでなさけなく討ちたてまつらんと思ひ返して心をしづむれば、父の敵、または譜代[注9]の主君の仇といひ、ひとかたならねばと思ひ定めけれども、何心もなくわたらせたまふ有様を見ければいたはしく堪へかねけるにや、広縁に出でて大声を上げて泣き叫ぶを、人々も正義もおぼつかなく思ひたまふて、障子を開き見たまへるに、ふししづめるさまのただには見えずありければ、「いかにや」と問はせたまひければ、ありつる心の内を啓して、とにかくに君のため先君のため父がためにみづから死なんよりほかは候はずとて刀を取り直せば、ありつる人どもがみな涙にくれてありながら、いかでかさはあらんと取りつきてはたらかさねば、力及ばで後にはその刀にて髻押し切り、往生院にて形を変へ、君よりたまはせたる名なればとて、正寛法師とぞいひける。寺のかたはらに草の庵を結びて、もしも心の変はることのありもやせんとて、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範よりたまはりける刀は、ありし有様を詳しく書き添へて故郷へ返しけるとかや。いとあはれにこそはべれ。

（『吉野拾遺』より）

注1　津の国　……　摂津国。現在の大阪府の一部。　注2　河内　……　河内国。現在の大阪府の一部。
注3　阿倍野　……　摂津国の地名。現在の大阪府南部。交通の要衝。　注4　さそらへ　……　さすらい。
注5　恥ある一矢をも射候ひてこそ　……　恥ずかしくないような一矢を射ましてから。

注6　七めぐり　……　七回忌。　注7　髻取り上げさせて　……　成人の印に髻を結う役目を担わせて。
注8　吉野殿　……　後醍醐天皇。　注9　譜代の　……　代々お仕えしている。

問1　二重傍線部「いかでなさけなく討ちたてまつらん」を解答欄に書き写し、例にならって品詞分解しなさい。

【例】

副詞	助詞	動詞・終止形	助詞	助詞	動詞・連用形	補助動詞・未然形	助動詞・打消・終止形
かく	まで	おぼしめす	と	は	知り	はべら	ず

問2　傍線部ウ「いかなる人にやおはすらん」、エ「せんかたなくて」、オ「しらさん」、キ「おぼつかなく」をそれぞれ現代語訳しなさい。

問3　傍線部ア「討ちぬべきたよりのいかでなからん」、イ「少しおとなしくなりなば、よも近づけたまはじ」をわかりやすく現代語訳しなさい。

問4　傍線部カ「大声を上げて泣き叫ぶ」とあるが、なぜそのような行動を取ったのか。説明しなさい。

問5　傍線部ク「もしも心の変はることのありもやせん」とあるが、どういうことか。説明しなさい。